

第1回多摩川流域歴史シンポジウム

『多摩川流域の古代史』
～多摩川流域リバーミュージアムの取組につなげて～

講演：小田静夫氏
和田哲氏
江口桂氏

－開催報告－



平成28年4月16日（土）
多摩川流域懇談会

『多摩川流域歴史セミナー』

「多摩川流域歴史セミナー」は多摩川と人間の関わりの歴史を掘り起こし、「多摩川らしさ」としての地域文化を再発見することを目的として、先史・古代・中世・近世、近現代と年代を追いながら、多摩川流域の博物館、歴史館を会場として、地域に即したテーマで随時公開セミナーを開催していきます。

講演 小田静夫氏(東京大学総合研究博物館研究事業協力者)

～先史・古代において多摩川から生まれる視点～

■日本列島にいつごろ人類が登場したのか

これは今、人類学会、考古学会で非常に問題になっています。有名な2000年11月5日に明らかになった旧石器捏造事件で、しっかりした資料提示がない間違った歴史が教科書や各市区町村の市史、区史に載ってしまいました。

最近、沖縄で国立科学博物館の海部陽介さんという人類学者が中心になって、台湾から与那国島に葦舟で渡ろうと試みる研究が始まろうとしています。日本列島に最初に現生人類が登場した4万～3万年前という時代を意識しています。

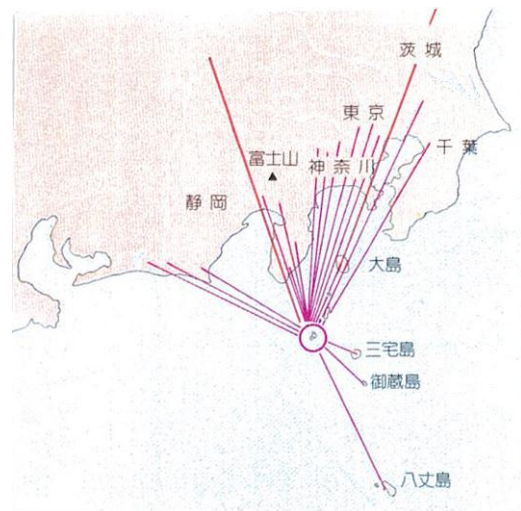
■府中で見つけた約3万5,000年前の黒曜石は世界最古の海洋航海の証拠品

府中の常設展示で「黒曜石」というコーナーがあり、一番端に1点だけ小さな黒曜石が飾ってあり、「伊豆諸島の神津島から来た黒曜石」と書いてあります。府中の武蔵台（今府中病院があるあたり）で出土し、約3万5,000年前のものです。この黒曜石は世界で最も古い海洋航海をした証拠品なのです。

世界では、ギリシャのエーゲ海で1万2,000年前に初めて海を渡ったとされていますが、日本は世界に先駆けて、3倍も古い時代にもう海を越えていたということなのです。

では、この黒曜石は神津島から武蔵台までどのように来たのでしょうか。当時、東京湾のあたりは単なる溪谷で、古東京川という川が流れていました。多摩川から東京湾にかけて流れていて、ちょうど横須賀の先あたりで海岸になっていました。旧石器時代の人々はそこへ上陸し東京湾を歩き、大田区あたりから多摩川に上り、それから今度は野川流域に入り、武蔵台へ行って、3万5,000年前に神津島の黒曜石で石器をつくったのです。

そのような歴史を調べていくと、多摩川は3万5,000年前から存在し、多摩川ができたのはもっと古い時代だと考えられます。さらに古い時代に、武蔵野台地ができるときに青梅のほうから砂利が流れて、それが少しずつ乾いて3万5,000年前ぐらいになると、やっときれいに武蔵野台地ができて、人間が生活できる環境ができたのです。それが一つの大きなテーマです。



神津島産黒曜石の伝播（旧石器時代）

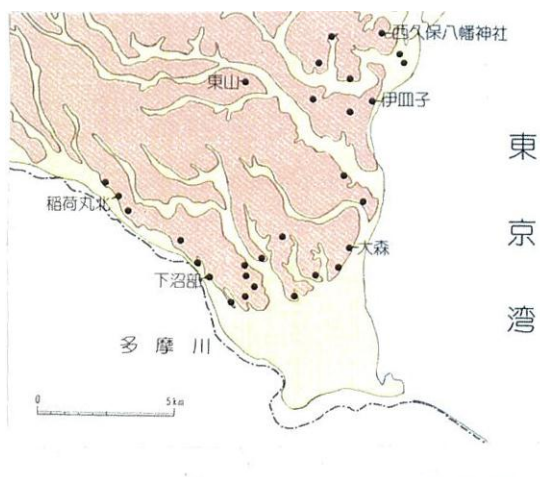
私は最近人類がどこから日本に来たかということの研究しているのですが、2つの方向から来たことが最近わかってきました。人類はアフリカから出て来たのですが、一つは朝鮮半島を経由して九州に、もう一つは南から沖縄を通して、それから太平洋側を舟で神津島に来て、黒曜石を見つけて、そして東京の溪谷をずっと上って行って、府中まで来た歴史が最近のデータで分かります。

旧石器時代の最初のころの日本列島は暖かく、雨が多く、多摩川は常に洪水が出て、人間が住むには余りいい環境ではなかったと考えられます。それでもそういうところに住んだということは、日本列島

の中で関東平野というのはかなり広い空間があったことが生活としてよかったのではないのでしょうか。

■縄文時代の遺跡

皆さん、旧石器人が死に絶えて縄文人が来たと思っているのではないのでしょうか。しかし、最近、旧石器人が縄文時代に混血し変化してきたという歴史が出てきました。混血を考古学で証明するのは難しいのですが、人類学的にはそのようになってきました。新しく縄文人が日本列島に渡ってきたというのは、最近あまり良い研究ではなくなってきたのです。



東京湾漁撈民の貝塚分布（縄文時代）

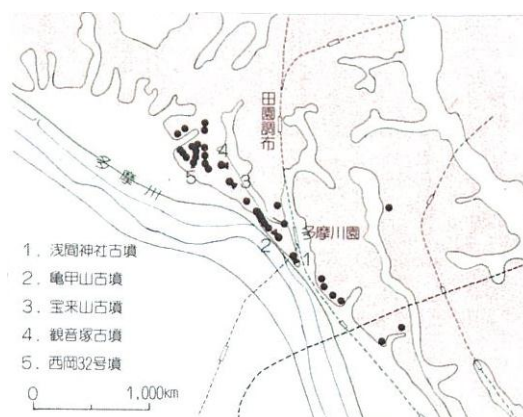
縄文人が生活する1万4,000年ぐらい前は、東京湾はまだ川でした。東京湾がいよいよ川ではなく湾になって、多摩川もきれいな水をたたえるようになったのは縄文時代前期の約6,000年前です。そのころの東京湾は、今より海面がかなり高く、海は関東平野の奥まで入っていました。群馬では藤岡ぐらいいまで海になっていました。そのため、海を利用して生活し、豊かな縄文文化が開けました。多摩川もかなり縄文人が行き来し、大田区付近ではたくさんの貝塚があり、海の幸を取って生活していたことが分かります。

そのように暖かかったころは縄文時代が豊かになるのですが、後期から晩期になるとだんだん寒くなり生活に困ってきました。

■関東での弥生文化のはじまりは遅かった？

そのような状況で弥生人が九州から日本列島に入ってきました。弥生人は確実に日本列島に入ってきた人たちです。縄文人は石器しか持っていなかったため弥生人との戦いで負けていきました。弥生人は鉄や青銅の武器を持っていました。瀬戸内海には、石の矢じりと青銅の武器が戦った遺跡が多く見つかっています。

弥生人にとっては、環境が問題でした。日本の弥生文化は水田と稲作が必要だったため、水田がつかれないところには、弥生文化は進みませんでした。武蔵野台地は、水田ができないような台地で、弥生人が余り活躍できない場所だったため、弥生文化が関東地方に入ってくるのは近畿地方よりずっと遅く、中期から後期ごろです。



多摩川下流域の大古墳群（古墳時代）

そして弥生文化が、特に多摩川の河口地域で開けて、国家ができてくるときに、初めて関西から大和政権が入ってきました。船に乗って東京湾を上ってきて、田園調布に大きな古墳をつくり、それから多摩川上流に向かってどんどん歴史がさかのぼってくると、今度は大陸の人たちが帰化人としての古墳をつくりだしました。府中の熊野神社古墳、三鷹の天文台構内古墳、八王子の北大谷古墳。そういうものがつくられた古墳時代に、武蔵国府のフィールド、この地域の発達した下地ができてきたのです。

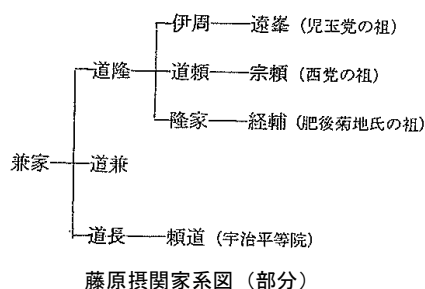




系図の真ん中辺の一番下のほうに「^{すえよし}季能 太郎」と書いてあります。鎌倉時代の1221年、幕府が実権を握るようになったころ、朝廷側の後鳥羽上皇が反乱を起こし敗れた「承久の乱」がおこりました。そのときに活躍した「季能」は、恩賞として朝廷側についていた甕島の土地をもらい、系図の下に「甕島小川氏」と書いてある息子の「小太郎 季直」を地頭として送り込みました。そのため、この系図が甕島にあったのです。

先日の平成28年熊本地震で、益城町が震度7を記録し被害を受けていますが、小川氏は、甕島の他にあの周辺の益城郡内にも70町歩という広大な土地をもらって治めたという関係があります。

この系図を見ると、西党の一番最初が「宗頼」という人になっています。そして「日野宰相」「流武蔵図」と書いてあります。「流」というのは流されてきたということです。藤原摂関家の系図を見ると、「兼家」「道隆」「道頼」と続き、その次に「宗頼」と書いてあります。正式の系図には名前が載っていないため確証はありませんが、この人だと考えられます。宗頼の父の道頼の兄である「伊周^{これちか}」が起こした当時の一条天皇の先代の花山法皇に関わる事件をきっかけに、一族がみな島流しになりました。



「甕島日奉氏小川系図」の「日奉^{ひまつり}」というのは、太陽祭祀（お祭り）です。これは敏達^{びだつ}天皇のころに置かれました。太陽の力が一番弱まる冬至に太陽の力の復活を祈ってお祭りをするのが「日奉」です。

「日野宰相」とありますが、武蔵国では、日野に本拠地を置いて太陽の祭祀が行われていました。恐らく流されてきた宗頼がその日奉氏一族の誰かと結婚して、日奉を名乗っていると思います。日奉氏が

日野に置かれた理由は、現地で見ればよくわかります。実は日野の台地の上から冬至の日の太陽を見ると、富士山の真上に沈むのです。縄文時代から、日本人は二至二分（夏至・冬至と春分・秋分）を良く分かっていて、縄文時代の人は、あの山の上に日が落ちるといような場所にモニュメントをつくっています。実は立川にある縄文中期の拠点の大集落向郷遺跡から見ても、冬至の日に富士山の真上に太陽が沈みます。そういう大事な場所で日奉が行われたと考えています。

そして、この系図は本来もっと非常に複雑ですが、わかりやすく作り直し、AとBに分けてあります。Bのほうを「宗弘」「為貞」、「〇〇 駄九郎」とたどると、その下の「宗時」のところに「立河駄東次」と書いてあります。実は「立河氏」というのはこのときから名乗っていると考えています。「立河」という苗字が出てくるのはここが最初で、それ以降はみんな「立河氏」を名乗っています。また「駄」の付く名前が多いのは、一族が馬を使った運送業に関わっていたためと思われます。時代をたどっていくと「立河」も非常に古い歴史があるということです。

■「立川」の由来

「立川」という地名については、明治の初めに町制をしくときに、正式に「立川」になりました。それまで「立川」は「柴崎村」と呼んでいましたが、同じ多摩郡の調布に「柴崎」という地名があったため「立川」にしたようです。この地名は急に取って付けたわけではありません。江戸時代の「柴崎村」ですが、特定のときだけ「立川」と名乗っています。このあたり一帯は尾張の徳川氏の鷹狩りの場所選ばれており、この鷹場の関係の書類では、「柴崎村」ではなく「立川」となっています。「立川」という名前は、潜在的にはずっと伝えられていたのです。こうして「立川」がやっと登場しましたので、前回の補足とし終わりにさせていただきたいと思います。



講演 江口桂氏(府中市文化スポーツ部ふるさと文化財課長)

～武蔵国府の成立と多摩川～

私は、これまで市民の皆さんに御理解、御協力をいただいて実施してきました1,700カ所を超える武蔵国府跡の発掘調査の成果をいかに還元するかを考えてきました。特に多摩地域は、膨大な考古学の発掘調査データの蓄積によって、古代の国府とその所在郡の集落のあり方を具体的に捉えることができる地域です。そこで、第2回歴史セミナーでは、こうした発掘成果をもとに、武蔵国府の成立と多摩郡の領域、『わみょうるいじゅうしょう和名類聚抄』記載の郷名比定について、「江口試案」をご提示しました。

本日は、「武蔵国府の成立と多摩川」と題して、お話をさせていただきたいと思います。

■古墳時代の遺跡と多摩川

まず、国府ができる直前の飛鳥時代の話です。江戸時代後期の文政6年に、植田孟縉が献上した「武蔵名勝図会」の中に、府中付近で東側から多摩川を見た図があります。この図の中に一里塚の跡があり、図の右上に古墳が多数描かれています。

現在、一里塚跡は、府中市のNEC事業場の敷地内に、府中市指定文化財「甲州街道本宿一里塚跡」として保存されています。

府中市では、古墳時代後期から飛鳥時代にかけて(6世紀～7世紀中頃)、多摩川の河岸段丘の沖積低地面から一段高くなった段丘崖(ハケ)の縁辺部に、多くの古墳がつけられました。特に、JR・京王線分倍河原駅からJR西府駅にかけて、高倉古墳群、御嶽塚古墳群がありますので、当時は、段丘の下に多摩川の沖積低地があり、多摩川の沖積低地から段丘崖を見上げると古墳のある風景が広がっていたと思います。

多摩川は、昔から蛇行して流れており、流路も時代によって変わっていたと考えられていますが、多

摩川中流域(狛江市から調布・府中・立川市あたりまでの間)では、段丘崖下の沖積微高地にもたくさんの集落跡が確認されています。以前は、府中市に弥生時代の遺跡はなく、古墳時代の遺跡も少ないと考えられていましたが、現在は東京競馬場の構内で弥生時代の遺跡が発見され、古墳時代の集落も数多く見つかっていますので、多摩川の沖積微高地にも累々と人々が住み続けていたことがわかるのです。

古墳時代後期から飛鳥時代では、沖積微高地というちょっとした高まりに、絶えず人々が住み続けていました。このことが国府成立前の府中の地域を考える上で大事なことだと思っています。

■武蔵国府が府中に置かれた理由

「府中市」という市名は、「国府の中」がその由来となっています。「国府」とは、今で言う都道府県庁に当たる「役所」だと言われていましたが、私は、国府が「武蔵国(現在の東京、埼玉のほぼ全域と、神奈川県横浜、川崎の一部を含む地域)の首都的機能を持った政治、経済、文化の中心となる古代地方都市」だったことを強調するようにしています。つまり、武蔵国府は、都から赴任してきた国司(筆頭の役人)を通じて入ってきた様々な最先端の技術や文化が、国中に拡散していくセンターとしての機能を持っていたのです。

さて、これまでの全国の国府の発掘調査の成果やそれらの立地を見ていくと、国府が置かれた理由は、次の4つに整理できます。

- ①(原則として)国の中で、より都に近い立地。
- ②国と国を結ぶ駅路(現代の国道)、国府と諸郡を結ぶ道路網と河川の沿岸などの交通の結節点という水陸交通の要衝。

③災害（津波等）に遭いにくい、安全な広い国府域が展開できる立地条件。

④在地の有力者が国府を誘致したとか逆にそれを避けて国府が設置されたのではない。

このような全国の国府の立地条件をもとに、武蔵国の国府が府中に置かれた理由を考えてみます。なお、武蔵国府は、今から1,300年ほど前の飛鳥～奈良時代にかけての7世紀末から8世紀初頭頃に成立し、全国的にもその頃に国府が成立したと考えています。

①国府の管理・運営を在地の有力者（後の郡司層）に任せられるだけの下地が整っていたこと。

府中市西府町にある国内最大最古の上円下方墳、武蔵府中熊野神社古墳が7世紀中頃（国府がつくられる50年ほど前）に築造されているので、南武蔵地域の有力首長がこの段階で府中の地にいたことがわかります。つまり、7世紀中頃の段階で、後に国府が置かれる下地がすでに整っていたことが、国府が府中の地に設置されたことにつながるのです。

②武蔵国の中でも南から見て一番都に近い立地。

③駅路（東山道武蔵路）、伝路（武蔵国府と諸郡を結ぶ道路網）と多摩川の結節点という水陸交通の要衝

武蔵国府が成立したとされる7世紀末から8世紀初頭、武蔵国は東山道という行政区分に属し、都から近江・美濃・信濃・上野の各国を経由して都と結ばれていました。しかし、万葉集などを見ると、その当時からすでに、多摩丘陵を超えて箱根から都へ向かう相模国経由のルートがあったこともわかっています。

このことから、都から相模国経由で来た場合、多摩丘陵を超え、多摩川を渡った最初の渡河点の平坦面で、後に国府を置くにふさわしい陸上交通と河川交通の要衝に武蔵国の国府が置かれたのです。

④災害（水害）に遭いにくい、安全な広い国府域を想定できる立地条件。

災害に遭いにくい安全な段丘の上に国府はつくられています。

今日配布した「ふちゅう地下マップ」は、昭和50年からの発掘成果に基づいて国府のまちの様子をあらわしたものです。国府がつくられた当時の多摩川は、国府により近いJR・京王線分倍河原駅のあたりからJR府中本町駅付近を流れており、JR府中本町駅西側の段丘崖の下に、「国庁」（役所の中核施設）に物資を荷揚げする場所があったと考えられています。そこでは、平安時代前期の国司館跡も発見されています。



ふちゅう地下マップ（府中市 2013）

今から1,300年前の飛鳥から奈良時代においても、国府という古代地方都市の機能を支えていたのが多摩川だったことがお分かりいただけたと思います。

最後に、ここ郷土の森博物館で、武蔵国府跡の発掘調査成果をまとめたブックレット『よみがえる古代武蔵国府』の改訂版が刊行されました。より国府のことを詳しく知りたい方は、ミュージアムショップでお買い求めいただきたいと思います。

ブックレットの表紙には、博物館本館常設展示室にある武蔵国府の模型の写真が使われています。全国68ほどの国府でも、発掘成果でこのような模型がつくられたのは、ここ府中だけで、模型の大きさも国内最大の大きさですので、ぜひご覧ください。



【小野館長】本日はテーマにそって、「古代史において多摩川とは何だったのか」といった問題に迫ることができればと思います。そのために古代における多摩川を考えていくためのキーワード、論点を挙げた上で質疑応答・意見交換を行いたいと思います。

①遺跡分布と多摩川の関係

②流通ルートとしての多摩川

③漁労の場としての多摩川

④飲料水や用水の供給源としての多摩川

⑤治水と災害との関係

⑥境界としての多摩川

⑦多摩川の「流域」とは何か

【参加者】約3万年前に武蔵台に持ち込まれた神津島産の黒曜石は、当時誰が採取し武蔵台まで運んだのでしょうか。また、多摩川の支流の野川のように小さな川でも、船で荷物を運べたのでしょうか。

【小田氏】府中の武蔵台遺跡で一番古い地層、立川ロームの第X層（約3～4万年前の火山堆積物）を現在発掘中ですが、その上部の第Xa地層から出た黒曜石が神津島産でした。

神津島の黒曜石が古い時代に武蔵台、野川上流域までどういう舟で運ばれたかはまだ研究されていません。旧石器時代には丸木舟は無いため、筏か葦舟、藁などで編んだ舟で渡ったのではとされています。

それでは神津島の黒曜石をどのように知ったのか。これが今謎なのです。最近、静岡県のある山麓で出土した中にも約3万5,000年前ぐらいの黒曜石が神津島産だと分かっています。太平洋岸に神津島の黒曜石が点々と見つかり、海岸線に沿って運ばれていることは確かです。一番山奥で見つかったのは長野県の矢出川遺跡（手前は八ヶ岳山麓）ですが、その1万2,000年前の黒曜石はほとんどが神津島だと分かってきました。

ほかにも黒曜石の産地はたくさんありますが（箱根、栃木県の高原山、信州など）、神津島の黒曜

石を取ってきた理由として、縄文時代ぐらいまでは、黒曜石を流通させた業者がいた（交易があった）のではないかと研究もあります。静岡県の伊豆半島の河津に段間遺跡という5,000年前の縄文時代中期の遺跡があり、そこで19.5kgの重さの神津島の黒曜石が出ています。私が発掘した小金井の荒牧という遺跡では、約2万年前の地層から出てきた2kgの重さの黒曜石が神津島産でした。そのことから、舟で海岸線まで来て、川（現在の東京湾）をさかのぼって世田谷と大田区の境から野川にのぼってきたと考えられます。

黒曜石は野川流域や多摩丘陵で多く見つかり、そういう黒曜石の交易ルートがあったということは旧石器時代から確かです。

【参加者】なぜ分析結果から神津島産だとわかるのでしょうか。

【小田氏】遺跡から出てきた黒曜石の産地同定をする（産地を見つける）理化学的な方法があります。黒曜石は火山ガラスです。火山のマグマが爆発し、空中で冷え、落ちたときにガラス質になるのです。

その噴火の年代をはかることができます。黒曜石を砥石で研いで原子炉に入れると、核分裂（フission）が起きます。それによって黒曜石につく傷（トラック）を調べると、何万年前にこの黒曜石が産地として噴出したのかということがわかります。「フissionトラック法」と言い、東京大学の渡辺直経先生が世界で最初に調べました。

大噴火の年代は神津島は約7万年前、伊豆半島の箱根は13万年前、長野も95万年、130万年と分かっているため、産地が分かります。

珍しい方法として、「水和層測定」という方法もあります。東京大学の鈴木正男先生が初めて開発しました。黒曜石を割ると徐々に表面に水がつき、その水を吸い込んでガラスの表面が少し曇ります。その膜（水和層）をはかります。それで見ると、日本の



黒曜石の利用開始は大体2万5,000年から3万年ぐらい前が最古ということがわかってきました。だから年代も、産地もわかります。

世界の黒曜石研究では日本が一番進んでいるのではないしょうか。明治大学に黒曜石研究センターという施設（長野県）がありますが、そこで出している研究報告書は素晴らしい内容です。

【参加者】 国司の館近くに運河らしき川がありますが、どの程度の大きさで水運を担えたのでしょうか。

【江口氏】 JR府中本町駅西側の段丘崖の下、沖積微高地上で、平安時代前期（8世紀末から9世紀前半）の武蔵国府の国司館跡が発見されています。非常に大規模な掘立柱建物があり、そのすぐ脇で大きな溝が見つかっています。

これはあくまで大きな溝であり、人工的な運河ではありません。そのため「運河状の大溝」と呼んでいます。当時は多摩川の古流路から枝状に支流が流れていて（「網状流路」と呼ぶ）、多摩川の本流から東京競馬場のほうにかけて、西から東に向かって支流が流れており、その近くで大溝が発見されたことから、国府の中枢施設である国庁への物資の荷揚げ場所として使われていたのではないかと考えています。

【小野館長】 流通と多摩川のことを考えた場合に、具体的に国府として何が運ばれ、何を運んで行ったのでしょうか。

【江口氏】 確実なところでは中世、鎌倉時代の終わりから室町時代にかけて、愛知県の知多半島周辺で焼かれた常滑焼の大甕が府中市で発見されています。そのうちの一つは、品川区の御殿山で発見された常滑焼の大甕と瓜二つのものがあります。品川歴史館で展示されていて、鎌倉時代の終わりから室町時代にかけては、間違いなく品川から多摩川をさかのぼ

って府中の地に物資が入ってきていた証拠と言えます。

その河川流通が古代までさかのぼるかどうかは非常に難しい問題ですが、例えば、愛知県から静岡県でつくられた平安時代の高級の焼き物である灰釉陶器や緑釉陶器が府中でもたくさんみつかっていますので、それらが海上輸送で運ばれてきて、品川辺りから多摩川をさかのぼって、入ってきているのではないかと考えています。それ以外にも、おそらく様々な物資が太平洋の海上輸送によって、品川辺りからさかのぼって入ってきたと考えて良いと思っています。

更に、今の八王子市と町田市の境あたりにある「御殿山窯跡群」（平安時代の古窯跡群）で焼かれた須恵器という焼き物が国府に大量に入ってきています。これらは間違いなく多摩川の上流から筏などで運ばれてきて、日野市と多摩市の境にある「落川・一の宮遺跡」が中継基地で、そこ経由で国府に入ってきたと考えています。

このように、古代においても、多摩川の上流と下流双方からの河川交通が発展していたと考えています。

【小野館長】 多摩川の上流である青梅市の郷土史の本を見ると、国府、国分寺の礎石があの辺から川を伝わって運ばれたという記述がありますが、国府の側としてはいかがでしょうか。

【江口氏】 例えば、飛鳥時代、7世紀中頃に築造された上円下方墳である武蔵府中熊野神社古墳の葺き石は多摩川の河原石ですし、武蔵国府と国分寺の礎石も、国分寺跡で大人が抱えられないような巨大な礎石が見つかることから、多摩川流域のどこからか運ばれてきたのでしょう。それが青梅あたりかどうかは分かりませんが、和田先生いかがでしょうか。



【和田氏】 私も詳しくありませんが、昔、国分寺の調査を手伝ったときに、この石はどこから運ばれたのかということを誰かが聞いたところ、石材の専門家がトンカチ出し、ポンとたたいて、においかいで、これは多摩川上流の石だと言ったのを覚えています。

【小野館長】 この流通ルートとしての多摩川の問題で、縄文時代に関するお考えをお聞かせください。

【和田氏】 縄文時代は河岸段丘沿いに道があり、そこが一番歩きやすいため、それを通って行き来していたのではないかと考えています。もちろん縄文時代でも、小さな川でも舟を使っています。例えば西武球場の近くの「下宅部遺跡」という縄文時代の終わりごろの遺跡からは大きな丸木舟が出ています。あのあたりは小さな川ですが、漁業をやっていたと考えられ「釜^{うけ}」という漁具も出てきています。

それから、よく問題になるのはサケの話です。多摩川と秋川の合流点にある「前田耕地遺跡」（約1万数千年前の遺跡）でサケの歯の骨が見つかりました。これを見ると漁業はかなり盛んであったと思います。そんなに豊かな生活ではないので、サケのように簡単につかみとれるようなものであれば、それは大いに利用していたと考えられます。山内清男先生という日本の縄文研究の大家の方が、縄文文化はサケ・マス文化だとおっしゃっています、実際にサケ・マスの骨がなかなか出てこないため、それは違うのではないかと言われていました。しかし多摩川をさかのぼったところでもサケの歯が出てきています。

最近勉強して知ったのですが、例えば古代人は物をとったりしたときに、またとれるようにという願いを込めて非常に丁寧に儀式を行うそうです。サケの場合は、食べた後に骨を川に流すことがサケがまた戻ってくるという意味を持っていると考えられます。アイヌなどの信仰の中にそういう方法があるようです。縄文人も同様のことをやっていたのではないかと思います。

ルートという点とはちょっと違いますが、河岸段丘を使った流通が多かったと思います。例えば最近では、国立の「緑川東遺跡」で1mもあるような石棒（縄文時代の大きなすりこぎみたいなようなもの）が4本並んで出てきました。そこではこの地域のものではない土器が多く出てきます。ほとんどは関西方面のもので、陸路ではなく海岸沿いに来て多摩川をたどって持ち込んできたと考えます。

また、この地域の土器とは明らかに違う土器が大量に出てきて、「胎土分析」という分析をすると、関西の紋様と似ているにも関わらず、関西の土ではなく、フォッサマグナよりも東の土で作られていると分かりました。つまり、土器をつくる技能を持った人がその時期に向こうから大量に來たと考えられます。川沿いの段丘崖のところを伝って交流があったのではないかと考えています。

【小野館長】 流通の問題から、それにかかわる漁労の話、それから遺跡分布の話に展開していただきました。漁労の場、生業の場としての多摩川という意味では、各時代、考古学の分野からどれだけ明らかにできるのでしょうか。

【小田氏】 海の幸を利用する暮らしがいつごろから始まったかは、関わる道具が見つからないと明らかにするのは難しい問題ですが、世界で一番古い漁具はインドネシアの島で見つかった4万年前ぐらいの釣り針です。一方、日本列島では旧石器時代の漁具が見つかった例はありません。

あきる野市の「前田耕地遺跡」では、縄文時代草創期（約1万4,000～5,000年ぐらい前）の土器が出てくる住居址の中から、大量のサケの歯が出てきて、多摩川上流の秋川でサケ漁をしていたと考えられます。これが日本で最古の漁労の証拠ではないかと思っています。ただ、漁具ということになると、国分寺市の「多摩欄坂遺跡」から出ている、細石刃という



旧石器が大体2万年から1万8,000年ぐらい前のもので、銚ではないかと考えられます。

新潟県の信濃川上流に「荒屋」という遺跡があり、細石刃が多く出ています。そこも信濃川が千曲川に変わる分岐点ですので、サケをとったのではないかと考えます（そこではサケの骨は出ていません）。その道具が細石刃ですので、縄文草創期から海の幸ではなくて川の幸をまず利用して、それから約6,000年前の海面が上がって、東京湾ができて、貝塚がいっぱい出てきた時期になると、一斉に縄文人は海に出て行くわけです。だから、縄文時代前期の約6,000年前頃から、本格的な漁労活動が始まったのではないかと考えられています。

【和田氏】多摩川の漁労という点で、はっきりしているのは縄文後期の初頭からです。その時代の「石鍾^{せきすい}」という平たい石の両側に刻みを入れて、網の下につける鍾にしているものがたくさん出てきます。ちょうどそのころは寒冷な時期になり、一時的に遺跡が減る時期なのです。その時期に多摩川でも網を使った漁が盛んになったのではないかと考えます。

千葉県などでは貝塚が多くあっても石器は出土せず、漁労具としては、石鍾のかわりに土器のかげらの両側に刻みを入れて網の鍾にする「土鍾」が多くできます。これに関しては、漁労用の鍾ではなくて、植物繊維で布を編むのに使ったという意見もありますが、私は漁労用の鍾と考えてよいと思います。

ただ、漁労ということになりますと、皆さん多摩川で遊んだ方はわかると思いますけれども、大げさな道具なんか使わなくても魚はとれるのです。僕が小さいころも、手づかみや大きな石を持って大きな石のところにぶち当てる「石ぶち」という方法で魚をとっていました。ですから道具が残らなくても、魚をとったという可能性はあると思います。

【参加者】熊野神社古墳をつくった豪族について教えてください。

【小野館長】熊野神社古墳、段丘状の古墳の豪族の勢力について、それと多摩川がどう関係しているのかということも含めてお話いただければと思います。

【江口氏】古墳時代の群集墳を構成している円墳は、今の自治会長クラスに当たる村長^{むらおさ}たちのお墓で、先ほどご説明した「武蔵名勝図会」に出てくる、段丘崖の縁辺部にたくさんつくられた古墳です。

そして、これらの古墳群とは全く別格な存在として、7世紀中頃に突如、下が四角くて上が丸い上円下方墳が築造されます。（上円下方墳は、国内で確実な例は6つしかありません）。その上円下方墳である武蔵府中熊野神社古墳は、段丘崖から500mほど奥まった場所に築造されていることなどから、やはり村長たちの墓とは全く別格の存在だったはずですが。残念ながら、その上円下方墳の被葬者がはっきりわからないため、私たちは市民の皆さんに「多摩大王」と呼んでいます。

また、多摩川流域には、熊野神社古墳と同じ切石切組積の技法で作られた横穴式石室墳が点々と見つかっています。特に、横穴式石室の形が「胴張り形」と呼ばれるもので、石室の石材は多摩川の河床や段丘のはけで採取される軟質の石材、「シルト岩」が使われています。この近くでは、三鷹市の東京天文台構内古墳、多摩市の稲荷塚・臼井塚古墳、八王子市の北大谷古墳、最近では国立市や狛江市でも、同じ胴張り形の横穴式石室墳が発見されています。

私は、これらの古墳が多摩川流域における後の古代の「郷」と呼ばれる行政区分の単位ごとに分布しているので、後の郷にあたる地元（地域）の有力者が葬られたのがこれらの古墳で、そのなかでも熊野神社古墳は別格な存在と考えています。

【和田氏】この辺の普通の横穴式石室はほとんど河原石を積んで石室をつくるのですが、僕の掘った昭島市の「浄土1号墳」という古墳だけは、周り全部河原石ですが、一番奥の石だけは物すごく大きな凝灰岩の一枚石です。凝灰岩質の切り石で積むとい



うのは技術が必要で、そういう石を使う人というのは河原石だけの人よりは多少力を持ったと思います。

【小野館長】 質問いただいている中で多いのが、冒頭で私が6番目に取り上げた、流域とは何かということです。これは自然科学的に、あるいは文化史的にも考えられる問題だと思います。

【参加者】 河岸段丘や扇状地、川の成り立ちなど一般的には上流は岩、中流は石、下流は砂と言われていますが、多摩川は河口の砂以外は大体石のような感じです。これは多摩川の成り立ちによるものでしょうか。

【小田氏】 多摩川上流に行くと岩石がたくさんあります。あれが崩れてチャートや砂岩になり、13万年ぐらい前の青梅から武蔵野台地の礫層（武蔵野礫層）に入っていますが、3～4種類の石が丸い転石で、角礫はほとんどありません。

それに関する研究を先日の学会で学生が発表していました。多摩川の砂利を全部調べていくと、上流から下流に向かって摩滅痕が多くなり、砂になっていくという研究です。それを見ると縄文時代で石器として使えるのは中流ぐらい（府中とか立川あたり）の石です。もっと奥に行くとチャートが使えます。

荒川は、秩父のほうには石がありますが、中流から下流は全く石がありません。また、千葉県の川は石はなく、遺跡から石器はほとんど出ません。多摩川は石材がとても豊富です。自然的な山から上流、中流、下流という川の形成部所によって、地域の特色があるのではないのでしょうか。

【和田氏】 確かに多摩川は非常に石が豊富で、それを反映して例えば縄文時代中期の終わりから後期の初めに、「敷石住居」というのが出てきます。住居の床面に全面石を敷き、柄鏡という丸に柄のついたような形をしています。千葉県方面では石が無いため住居の形だけ柄鏡になっています。

多摩川流域の特色として一番大事なのは、石材が豊富だということが生業に反映しているのではないのでしょうか。例えば千葉県方面の遺跡と同じ時代のものを比べていくといかにこの地域が石材に恵まれているかがはっきりします。多摩川でつくられた石器はこの辺で消費しながら、少ないところに供給したという側面もあると思います。

【小野館長】 府中付近では砂利採取が明治から非常に盛んに行われて、これが戦後禁止され、今では余り石は見かけなくなりました。

【和田氏】 以前、日野橋あたりのところの遺跡を掘ったときに専門家に研究してもらったのですが、多摩川で川の流れが土砂を削ってくるのはちょうどあのあたりまでで、それより下流はむしろ堆積傾向になると聞きました。

確かに最近は砂利採取等で随分変わったというふうに言われますが、私がよく行く河口から47km地点から48km地点付近は、一時は石がありませんでしたが最近は完全に復活し、昔の石河原になりました。

【小野館長】 非常に重要な御指摘をいただきました。石材が豊富な多摩川ということで、こうした自然科学的な条件が後の時代の歴史、文化的形成に大きな影響をした可能性があるという視点をいただきました。

【参加者】 沖積微高地という概念、ある意味新鮮に聞こえる方も多いと思いますが、この中流域での沖積微高地の遺跡の具体像、あるいは現在の沖積微高地と言われる具体的な場所等を教えていただければと思います。

【江口氏】 国府の時代では、博物館本館2階の国府の模型を見ていただくと、現在の東京競馬場あたりに「条理水田」が復元されています。残念ながら古代の水田と確実にわかるものは、発掘調査でははっ



きりと見つかっていませんが、様々な根拠をもとに博物館の深澤学芸係長がこの模型をつくりました。

「是政条里」と呼ばれてきた条里水田が現在の東京競馬場周辺にあって、JR府中本町駅から川崎方面に向かって走る府中街道が、古代以来の沖積微高地の高まりを利用しているのではないかと考えておりまして、その周囲にある沖積微高地で古代の人々が暮らしの場をつくっていたのではないかと考えています。

府中に来て初めて沖積低地で発掘調査をした際に、多摩川の河原石しか出てこないようなところに堅穴建物がつくられていることに驚いた記憶があります。多摩川の河原石が出てくる場所でも堅穴建物をつくるということは、それだけ人口が国府には集中していて、沖積微高地上でも人々が生活しなければならぬ理由があったのでしょう。

なかなか府中では条里水田の実態がわかっていませんが、川崎市では条里の痕跡がよく残っていて、川崎市の元教育委員会職員だった村田文夫先生がご研究され、論文も書かれていますので、参考になると思います。

【小野館長】 問題を次に移しますが、水害とか治水の話題です。一昨年は京都嵐山で、昨年は常総市で大変な水害があり、同じようなことが多摩川でも起こり得るということは聞いております。

古代における考学の中で、多摩川の水害というもの克服した痕跡、記憶がどこまでたどれるのかお聞きしたいと思います。

【江口氏】 先般、府中消防署の皆さんにお話をするにあたって、年表で多摩川の水害を拾ってみました。多摩川の水害をさかのぼっていくと、確実なところとして江戸時代の記録はありますが、古代の記録は9世紀中頃、多摩川かどうかわかりませんが、「武蔵国水害」という記録が唯一のようです。

これまでお話ししてきたように、東京競馬場周辺の沖積低地では、いつの時代でも人々が営みが続けています。大きな洪水があったとしても、その後すぐに人々は住み始め、その結果、沖積低地でも人々の営みが続いてきたのでしょう。

【和田氏】 やはり江戸時代、近世以降でないとも正確な記録はないと思います。伝承では幾つかあるようです。昭島市拝島町に大日堂というお堂があり、その仏像の胎内仏は、平安時代、大洪水で日原から流れてきて、たまたま拝島にその仏像が流れついたという伝承があります。

昭島地域では、幾つかの部落が江戸時代に流されて、段丘の上に上がって新しい集落を営んだところが3カ所ぐらいあります。逆にいうと近世までは、結構河原の沖積地の面に大勢人が住んでいたということの裏返しなのです。ですから、ある程度洪水に遭わずとも生活できた期間が古代から中世、近世にわたってあったのではないかと思います。

【小田氏】 縄文時代にしても旧石器時代、弥生時代は、やはり台地の上に生活するため、水が上がったかどうかという証拠はなかなか見つかりません。調布市の下原・富士見町遺跡の発掘では、大体3万年ぐらいのところに地層の乱れがあり、三鷹と調布あたりの段丘、いわゆる野川の低い段丘のところに大きな洪水の痕跡が見えたということがありますが、それによって遺跡が破壊されたということはありません。

先史時代は水害より、むしろ火山災害が多く、火山の噴火で遺跡が消滅したり、遺跡の種類が変わったりということがあります。一番大きなのは今から2万9000年前に、鹿児島島の始良というところで大規模噴火があり、東京でも10cmぐらい火山灰が積もって、そのところに遺跡が減っています。

また、多摩ニュータウンを発掘していると、縄文時代早期の終わりぐらいに鹿児島県の鬼界ヶ島沖の海底火山が爆発し、その噴火物が確認される時期に集



落が少なくなって、落とし穴ばかり出てきます。先史時代においては火山以外には遺跡への影響は余り確認されていません。

【小野館長】 具体的な話は、今後予定されている中世史、近世史の歴史セミナーで明らかになってくるのかなと思います。

古代の多摩川を考えていく場合に避けて通れないのは地名の問題かと思います。多摩川の場合、万葉集では「多麻」と出てきます。平安時代には「和名類聚抄」に郡の名前として、「多磨」と書いてこれルビを振って「たば」と読ませているようです。「たまがわ」なのか、「たばがわ」なのかということもあらうかと思いますが、現に多摩川の源流の山梨県のところでは、「丹波川」と書いて「たばがわ」と呼んでいるようですので、古くからは「たばがわ」だったのか、そういった問題になるかと思います。

それに関係して、多摩川が流れていたから「多摩」という地名が起きたのか、多摩を流れていったから「多摩川」という名前が出てきたのかという、その辺が非常に微妙でまだ定説がない状態だと思いますので、そのあたりを先生方に締めくくりとしておっしゃっていただければと思います。

【江口氏】 まず万葉集で、有名な「多摩の横山」とか、「多摩川にさらす手作りさらさらに」と出てくる「多摩」というのがあります。

発掘調査では、府中市の大國魂神社境内の東側に多磨郡の郡司層が建立した「多磨寺」と呼ばれていた寺院跡が発見されています。そこで出土した瓦に「多磨寺」と書かれているのが最も古い「多磨」の記載例です。

年代は、そこから出土した「珠文縁単弁八葉蓮華文」の軒丸瓦が統一新羅という朝鮮半島の王朝でしか出ていない紋様にそっくりで、国内に類例がない

紋様であることから、8世紀前葉と考えられています。その頃には、「多磨」と書かれていたことがわかります。

このほかでも、武蔵国府跡では「多摩」の字が書かれた文字資料が発掘されています。奈良時代後半頃の土師器甕に「多麻」と書かれたものが出土しているので、古代人は、「たま」は「多磨」でも「多麻」のどちらでもいいと思っているわけで、余り字そのものにこだわりはなかったのかなと思っています。

多摩川については、古代の発掘資料には出てきませんが、多磨郡の「多磨」、「多麻」のように、様々な使用例があるので、そういった資料を総合的に検討していくことが重要と思っています。

【小田氏】 多摩川は縄文時代は何と呼んでいたんですかね。古墳時代ぐらいに何か玉造があれば「たま」と呼んだかもしれませんが、「魏志倭人伝」などに載ってないのでしょうか。

【和田氏】 私は国立の仮屋上遺跡というところで、石の紡錘車を掘っています。あれは奈良時代の前半の紡錘車ですが、これには「武蔵国多磨」と、「多磨」で書いてありました。上流の丹波川はともかくとして、このあたりでは、あの字を当てて「多磨」と書くのが正字だったのかなと思います。

【小野館長】 難しい問題、どうもありがとうございました。一つ補足させてもらえば、民俗学の方言研究では「ば」と「ま」というのは容易に通用するので、「たばかぜ」と「たまかぜ」を同じだと言うことがあるので、もしかしたら「たまがわ」でも「たばがわ」でもどっちでもいいのかもしれませんが。そのようにアバウトなところも古代史のいいところだなと思うところです。



小田 静夫 氏 プロフィール



1942 年 東京生まれ

1972 年より東京都教育庁文化課勤務

この間、都内の遺跡調査、伊豆・小笠原諸島、琉球列島など、数々の
「旧石器遺跡」の発掘調査を手がける

2003 年 退職

2005 年 岩宿文化賞受賞

2009 年 伊波普猷賞受賞

現在、東京大学総合研究博物館研究事業協力者としてご活躍

和田 哲 氏 プロフィール



1936 年 東京都生まれ

1959 年 早稲田大学卒業

1961～2001 年 立川女子高等学校教諭

1984～1990 年 女子美術大学講師

2003～2005 年 立正大学非常勤講師

日野市遺跡調査団長・八王子市南部地区遺跡調査団長ほか

2002 年 地域文化功労章（文部科学大臣）

現 在 昭島市文化財保護審議会会長、

国立市・立川市・羽村市・日の出町文化財保護審議委員

著書 『館山鉾切洞窟の考古学的調査』（共著）、『縄文前期浮島系土器論』ほか

江口 桂 氏 プロフィール



1966 年 愛知県生まれ

1988 年 中央大学文学部史学科国史学専攻卒業

1990 年 国学院大学大学院文学研究科博士課程前期修了

同年、府中市教育委員会に勤務

現在、府中市文化スポーツふるさと文化財課長

著書に『古代武蔵国府の成立と展開』（同成社古代史選書）がある



総合司会・第1～3回歴史セミナーのおさらい：佐山 公一（多摩川流域懇談会運営委員会）



本日の歴史シンポジウムを開催するにあたって、歴史セミナーを過去3回行ってきました。もともと多摩川には「多摩川リバーミュージアム構想（TRM）」という川全体を博物館化して、いろいろと地域の人たちと学んでいこうというような考えがあって取り組んでいます。実際に多摩川流域懇談会の中で、歴史について学んでいこうではないかという思いで始まった歴史セミナーでした。今日の第1回歴史シンポジウムは、さらにこの後、中世につなげるための一つのステップとしての位置づけでもあります。本日はお話を振り返りながらいろいろ知識を深めていただくとともに、新たな興味、新たな関心を皆さんに持っていただいて、これからもご参加をよろしく願います。

開会挨拶：藤井 政人（京浜河川事務所長）



これまでの3回の歴史セミナーのまとめのシンポジウムということで、ぜひじっくり多摩川の歴史、あるいは地域の歴史についてお聞きになっていただければと思います。川というのは、どこの地域でもそうですが、その地域の文化や歴史、あるいは地域づくりの源になってきています。今はいろいろな意味で行政界があって区切られていますが、本来は行政界というよりも、その流域や川単位の生活の歴史もあったわけです。きょうは中でも古代についていろいろなお話を聞かせていただけるのではないかと、私も楽しみにしています。

館長挨拶：小野 一之（府中市郷土の森博物館館長）



本日は、多摩川流域歴史セミナーを当郷土の森博物館で開催していただき、どうもありがとうございます。第2回多摩川流域歴史セミナーを、同じこの会場で開催していただき、よく帰ってきくれたのかなと思っています。

御承知のとおり府中市は、南の境を多摩川が流れており、その反対側は稲城市、多摩市になっております。この郷土の森博物館の敷地の、柵の外の堤防に「河口から33km」という表示があります。33というのは多摩川の源流から河口までの距離のちょうど4分の1にあたり、そういった縁もあって大変うれしく思っています。

府中市では、「武蔵国府」の設置と多摩川が非常に関係があります。もしここに多摩川が流れてなかったら、国府もここに置かれなかった、ということは「府中」という地名も、その後の歴史というのとも今とは全く違っていたということは間違いないと思います。そうしたことはどこの地域にもあったかと思いますが、多摩川をめぐる地域の歴史を掘り起こしていく、常に考えていくということは非常に大切なことだと思います。

そうしたことが川と流域の自然を守りながら、時には大暴れする川とこれからつき合っていく、一つの考えるヒントになるのではないかと、私は思っています。そういった意味で先生方からお話を深めていけるということを非常に楽しみにしています。

閉会挨拶：竹本 隆之（多摩川流域懇談会運営委員会副委員長）



この多摩川流域歴史セミナーについて、きょうは1つ目のステップ「古代史」について、3つのセミナーのまとめということで開催させていただきました。これから「古代」の次は「中世」、「近現代」と進めていき、皆さんと一緒に多摩川の歴史について学んでいきたいと思います。

それから、主催している多摩川流域懇談会は、市民と行政が協働して、いい川づくりのためにいろいろ取り組みをしているものです。今日の歴史シンポジウムもそうですが、これ以外に多摩川流域セミナーもこれまでに45回開催し、去年はアユや災害をテーマに実施しました。

ぜひ歴史も含めていろいろ多摩川について知っていただいて、市民の皆さんと一緒にになりながら、いい川づくりを進めていきますので、応援団になっていただければと思います。今後もこういうセミナーにぜひ御参加いただき、皆さんで多摩川のことを考えていきたいと思います。

常設展示案内ツアー



シンポジウム開催前に、学芸員の佐藤はるかさんより大國魂神社のくらやみ祭、古代の遺跡や出土品、謎を秘めている板碑、江戸時代の高札等の常設展示物について、身近な話題を交えながら解説していただきました。

第1～3回多摩川流域歴史セミナー 振り返り

第1回多摩川流域歴史セミナー 『考古学的視点から見た多摩川の歴史』

日程：2014年11月16日（日）13:00～15:00

場所：大田区立郷土博物館 2階会議室

主催：多摩川流域懇談会

協力：大田区立郷土博物館

参加者：計48名（スタッフ含む）

プログラム

○ 総合司会

神谷 博氏（多摩川流域懇談会歴史部会委員長）

1. 開会挨拶

中村 文明氏（多摩川流域懇談会運営委員長）

2. 館内紹介

岡本 慎一氏（大田区立郷土博物館館長）

3. 講演『考古学的視点から見た多摩川の歴史』

小田 静夫氏（東京大学総合研究博物館研究事業協力者）

- ・大森貝塚や久が原遺跡等、大田区周辺の遺跡の概要や考古学上の位置づけ
 - ・人類の誕生、移動と多摩川の関係 等
- 多摩川流域に関わる歴史について、長期的で幅広い視点から目から鱗が落ちるようなお話をお聞かせいただきました。

4. 質疑応答・意見交換

関東地方の地層の特異性や先史時代の多摩川周辺の利用、縄文期のサケの分布等に関する質問がありました。

5. 閉会挨拶

船橋 昇治（京浜河川事務所長）



開催報告



小田先生のご講演の様子



中村運営委員長のご挨拶



岡本館長の館内紹介



ご発言中の神谷氏



船橋所長の挨拶



会場の様子

第2回多摩川流域歴史セミナー 『武蔵国府の歴史と多摩川中流域の古代集落』

日程：2015年1月18日（日）13:00～15:30

場所：府中市郷土の森博物館会議室

主催：多摩川流域懇談会

協力：府中市郷土の森博物館

参加者：計75名（スタッフ含む）

プログラム

○ 総合司会

神谷 博氏（多摩川流域懇談会歴史部会委員長）

1. 開会挨拶

宮林 茂幸氏（多摩川流域懇談会会長）

2. 館内紹介

小野 一之氏（府中市郷土の森博物館館長）

3. 講演『武蔵国府の成立と多摩川中流域の古代集落』

江口 桂氏（府中市文化スポーツ部ふるさと文化財課長）

- ・古代律令国家の成立と国府 ～国府とは？
- ・なぜ、武蔵国の国府が府中市に置かれたのか？
- ・考古学から明らかにできる古代の多摩郡と郷の内実等多摩川と府中の国府設置の関係や多磨地域（古代における多磨郡）という広域的な捉え方についても考古学的視点からお話をさせていただきました。また、集落の移り変わりを時系列に沿って分かりやすくご説明していただきました。

4. 質疑応答・意見交換

コメンテーター：小田 静夫氏（第1回講演者）、
江口 桂氏、小野 一之氏

府中での条里制の有無や他国の国府の状況、古代の多摩川の流路に関する質問がありました。

5. 閉会挨拶

船橋 昇治（京浜河川事務所長）



開催報告



開会挨拶



江口氏ご講演の様子



意見交換会の様子



質問に回答中の江口氏



質問に回答中の小野氏



閉会挨拶

第3回多摩川流域歴史セミナー 『多摩川上中流域の先史・古代』

日程：2015年6月21日（日）

〔午前の部〕10:00～12:45

〔午後の部〕14:00～16:50

場所：〔午前の部〕西立川駅～柴崎体育館駅前

〔午後の部〕昭和記念公園会議室

主催：多摩川流域懇談会

協力：立川市歴史民俗資料館

参加者：午前…52名、午後…65名（スタッフ含む）

プログラム〔午後の部〕

1. 開会挨拶

神谷 博氏（多摩川流域懇談会運営委員長）

2. 館内紹介

小野 一之氏（府中市郷土の森博物館館長）

3. 講演『多摩川上中流域の先史・古代』

和田 哲氏（多摩考古学研究会）

・地質から弥生時代までの遺跡や人々の暮らしの概要
・多摩川上中流域の遺跡とその特徴
他
多摩川上中流域（昭島～立川周辺）は、新しい地層と海の中に堆積した古い地層（海成層）の境目にあり、多くの化石が発見されているとのことがありました。また、昭島周辺では立川、青柳、拝島の3つの段丘があり、湧水が多いことから人が暮らすようになり、段丘の上から沖積面へ向かって、多摩川の方へ人々が住み移ってきたことについて説明がありました。

4. 質疑応答・意見交換

コメンテーター：小田 静夫氏（第1回講演者）、
和田 哲氏

和田先生からは、お持ちいただいた石器や黒曜石を実際に示しながら、説明の補足がありました。

5. 閉会挨拶

船橋 昇治（京浜河川事務所長）



開催報告



開会挨拶（神谷氏）



ウォーキングの様子



立川地域の説明（井上氏）



立川市歴史民俗資料館での説明



和田氏講演の様子



閉会挨拶

〔午後の部〕-立川の歴史と水みちをたどる-

西立川駅を出発し、立川崖線の地形（高低差）を肌で感じ、流路の変遷を学びながら残堀川沿いを歩きました。立川市歴史民俗資料館では、学芸員の方から歴史や文化財等についてご解説いただきました。

～当日の流れと見学箇所～（【 】内は説明者）

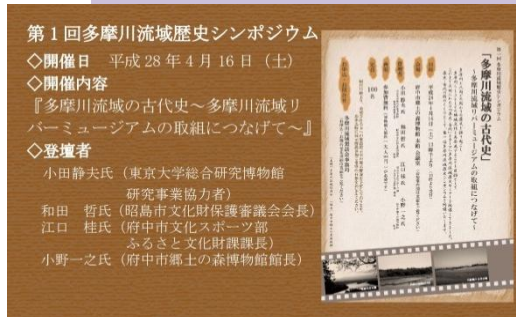
- 開会挨拶【神谷 博氏（多摩川流域懇談会運営委員長）】
- ① 農林総合研究センター【鈴木 孝佳氏（東京都建設局）】
- ② 湧水（富士見緑地）、立川地域の歴史等
【井上 洋司氏（背景計画研究所）、山口 昭氏（立川市まちづくり部）】
- ③ 立川市歴史民俗資料館【浦島氏、高橋氏（立川市歴史民俗資料館）】
- ④ 日野の渡し跡【立川市まちづくり部 山口 昭氏】
- 午後の部締めの挨拶【竹本 隆之（京浜河川事務所副所長）】



当日のルート



各回の多摩川流域セミナーで「歴史セミナーカード」を配布しています。



表面 各回の歴史セミナー概要を掲載



裏面 会場となる博物館情報を掲載

第1回多摩川流域歴史シンポジウム『多摩川上中流域の先史・古代』開催報告

作成 多摩川流域懇談会

■多摩川流域懇談会は、多摩川にまつわる歴史文化を総合的に研究し、その成果をわかりやすく多摩川で活動する人が利用し、多摩川をより深く知ることができるよう、取組みの幅を広げ、活動を行っています。

■多摩川流域歴史セミナーに関する情報は京浜河川事務所ホームページをご参照ください。

URL: http://www.ktr.mlit.go.jp/keihin/keihin_index116.html

